

活動報告

団体名	被災地 NGO 協働センター
活動名	西原村の集落復興のための知恵とネットワークをつなぐ場作り活動
活動期間	2017年4月～2018年3月
活動の成果	<p>当初の目標は、集落の議論に参加することで、集落の復興をどのように描いていくのかを住民が自発的に描くことを目指していたが、今回の活動を通して、古閑集落・大切畑集落の住民の方々の再生プランが固まっていった。この2集落は熊本県内でもいち早く再建プランを立て、宅地造成の工事も県内で一番早く（大切畑）に着工する予定になっている。当初は、両地区とも集落での再生を諦め、集落の外での再建をされる方々が多かったが、話し合いを重ねるうちに集落の中で再建をしたいと考える方が増えていった。（例：大切畑集落では約30軒のうち、当初2軒のみが集落の中で再建すると希望していたが、現在では約半数が集落内での再建を目指している）</p> <p>このように、集落の方々が主役となって再建を目指すプランづくりを進めていくことができ、当初の目標は概ね達成できた。</p> <p>また、大座談会等によって村の内部での情報共有を図った結果、みなし仮設住宅の方々の思いを各地域の方に知っていただく機会となり、みなし仮設住宅の方対象のお茶会を開催することにつながった。</p> <p>過去の被災地への視察については、当初こちら側が企画などを持ちかけることが多かったが、新潟・中越への視察を消防団の若手メンバーが行い、その報告を集落内で行ったことによって、婦人会などが自分たちも視察に行きたい、という声を上げてくださるようになった。このように、集落内での自発的な活動が増えてきており、視察での学びと共に集落内での復興へ向けた活動の活性化という相乗効果を生んでいる。</p> <p>今後の課題は、集落自体の人口は減ってしまっているため、従来の集落の姿には戻れないということ踏まえて、復興住宅に移らざるを得ない人や集落の外での再建をする方々と、集落内で再建する方々とがバラバラになってしまわないようにしていくことである。農作業や区役（草刈りなど）、祭りなどを通して、集落にゆかりのある方々とのつながりを保ちつつ、外部の交流人口を増やすことで集落の持続可能性を高めていくことが必要であると感じている。</p>
寄付者へのメッセージ	<p>今回の活動を通じて、住民の方々の自発性が高まっていきました。集落での再建を目指す復興プランづくりや他の被災地との積極的な交流など、住民の方々が自らが主役となり今の被災地の課題を見つめ直し、また、住宅の再建を最終ゴールとせず自分たちの集落の未来を考えていくようになっていきました。復興に向けた寄り合いの場に、私たちが第三者として関わることで、役場と住民との間もより良い関係を構築し、議論を進めることができました。世代間での議論も地震前まではそれほど活発ではありませんでしたが、地震後、特に過去の被災地への視察をきっかけとして、集落の将来について若い人と年配の方が活発に議論を始めています。そして女性の意見もどんどん取り入れた方が良い、という方も増えて行きました。</p> <p>集落自体の人口は減ってしまっていますので、課題は残っていますが、将来に向けてどのような取り組みをしていけば、集落を次の担い手に引き継ぐことができるのか、20～30代の若手も含めて活発な意見交換が生まれてきています。</p>

(活動のようす)

